

明月記回想

四十年前にも前にならうか、その頃私は平安から鎌倉初期の名筆を蒐集することに熱中していた。

当時は戦後日が浅く「荷生活」といわれ、生活のため諸家の蔵から旧蔵の名品が世に出ることがあった。

従って私のような貧書生でも多少無理をすれば、平安時代の歌切などを入手することができたのである。

藤原定家卿の筆跡は、是非入手したいものの一つであった。幸い定家卿は「明月記」という日記を数多く遺している。そこでその断簡でよいから一幅入手したいと思ったのである。

古美術商・古書肆とは大分懇意にしていたので、本郷や赤坂・神谷町など古美術行脚をしていたのである。

昭和二十四年の歳末と記憶するが、年末の賞与の大部分を懐中に、懇意の古書肆を本郷に訪ねた。

「何か面白いものはありませんか」と問う。主人は「丁度先生に向くものが手に入りました。東大の史料編纂室でも垂涎の筆蹟です」と言う。

一覧すると明月記の断簡一葉、未表具である。巻物の一紙分がある。

かねがね、定家の明月記は断簡でよいから一幅入手したいと思っていたので、一も

二もなく傾けて貰うことにした。

珍らしいことに歌一首の書き入れがある。数多い明月記の中でも歌入りは見たことがない。將に珍品といえる。

値段は懐にした金額を全部払うと帰りの電車賃がなくなってしまう。そこで帰りの運賃だけ値びきして貰って購めた。

生憎雪になって寒い晩であった。帰宅して早速妻に一部始終を話し、よい正月を迎えることが出来たと内心得意であった。

年が改まり年始のご挨拶にと、恩師田中親美先生のお宅を訪ねた。風呂敷包みには勿論明月記断簡一葉を入れてである。

年頭の挨拶をすませ、持参した断簡一葉

石井裕

を先生の膝下に披げ、お目にかけて。

先生は、「定家ですか」と一言、定家について何もお話にならない。

名品を入手して、お目にかけてと我が事のように喜んでくださる先生が「定家ですか」の一言である。

明月記の話はなく、大倉喜七郎氏の壮年時代の逸話を話してくださった。

そこで不審に思つた私は、帰途先生の女孀福田氏を訪ねた。

福田氏に件の断簡一葉の鑑定を願うと、電灯の下に透かされて「これは義父は褒めなかつたでしょう」と言われる。

洵にそのとおりですと申し上げると、これは、「写しですよ、義父が褒める筈がない」と重ねて教えてくださる。

福田氏に「写しだ」と言われると、今迄よいと思つていたところが、ことごとく怪しく見えてくる。

自分の眼識の浅いこと、勉強が足りないことを痛感させられる。頭から冷水を浴びたようにさえ思える。

「定家はなかなかむずかしいですね」とい

う福田氏の一言が救いであった。

ところで「相当の価で購めたでしょう」と語りかけられる。

「懇意の書店ですから返したらよいでしょう」とも言われる。そこで七草が過ぎてから書店を訪ね、他の品と交換して貰つて一件落着したが、これを踏み台にして定家の真筆を一点でよいから入手しようとして期した。

その後、田中先生のお宅に伺つて、先生に事の次第をお話した。先生は、「君が定家を手したとあの様に喜んでゐる顔を見ては、可愛想で写しだとは言えなかつた」と話された。

「君ほど熱心に勉強している人が定家がわからぬ筈はない」と言われて、先生ご愛蔵の記録切の一幅を貸してくださった。

「得心のいくまで鑑賞なさい。得心がいったら返しに来たらよい」ともつけ加えて笑顔でお見送りいただいた。

定家の一幅のみならず古典の勉強について先生から受けたご高恩は終生忘れることができない。

数年後、懇意の古美術商を訪ねると、主人が「先生向きのものが一幅ありますよ」と言う。

早速見せて貰うと、定家卿筆の「記録切」である。俗に小記録といい、定家が折にふれて自分の記録に書きとめて置いた冊子の断簡である。

その一幅を携えて先生にお目にかけてのことができた。やつと定家卿の鑑定に合格したのである。

並々ならぬご高恩を受けた田中先生は百歳の天寿を全うせられて世を去られた。先生のお宅に初めて伺つたのは数え年十七歳の若輩であった。先生は若輩の私を我が子のように慈しんでくださった。今日多少古美術について語ることができるとも、一に先生のご高恩によるものである。

結局勉強は一つ一つ堅実に積み重ねる他に道はない。よき師に恵まれた私は果報者だと痛感している。人生勉強以外に道は開けないと思う今日この頃である。